心身健康

ドクターに聞く

子宮腺筋症

閉経後の症状 再評価必要

産婦人科医
今井篤志さん
松波総合病院
腫瘍内分泌センター長
（羽島郡笠松町田代）



子宮筋腫は30歳以上の女性の30％前後、40歳以上では40～50％にみられる良性の腫瘍です。約半数は無症状ですが、定期的な経過観察や治療のために通院が必要になることも珍しくありません。子宮筋腫の発生や成長には卵巣から分泌されるエストロゲンおよびプロゲステロンが関与しています（2015年1月19日付本欄参照）。

では、閉経後には子宮筋腫はどうなるのでしょうか？ 今回は閉経前後から閉経後の子宮筋腫のフォローを考えてみましょう。

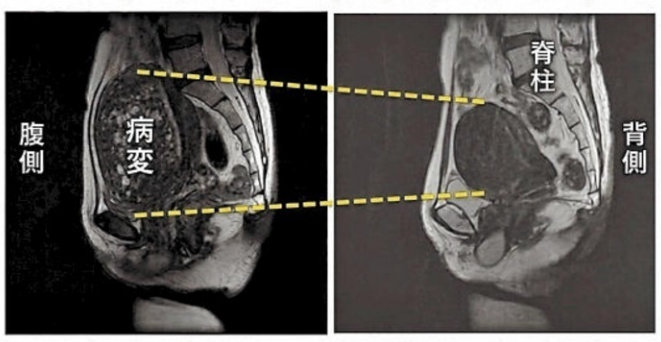
閉経後はエストロゲンおよびプロゲステロンの分泌がなくなるので、自然に縮小し症状も軽快することが多いのですが、筋腫そのものが消失することはありません。少数ですが、閉経しても明らかな縮小を示さない場合があります。

その原因として脂肪組織でのエストロゲン産生や筋腫自体での成長ホルモン、炎症物質やエストロゲン分泌が挙げられます。特に脂肪組織の多い肥満がある場合には、その傾向が高くなります。また、筋腫の石灰化や変性が生じるとサイズの変化も乏しくなります。

更年期症状対策や骨粗しょう症などの予防として、エストロゲン剤あるいは大豆イソフラボンなど植物性エストロゲンを含むサプリメントを服用していると、閉経を過ぎても筋腫が小さくならないことがあります。

子宮筋腫と類似した疾患の子宮腺筋症もエストロゲンが病変の成長や症状の増悪に関与しており、閉経後には病変の縮小や症状の軽快が認められます。子宮腺筋症は子宮筋腫の場合よりも症状（月経痛、過多月経など）が強いことが多いのですが、閉経の影響がより強く現れるのが一般的です。閉経に伴って病変が縮小した子宮腺筋症の一例を示しました＝図＝。

閉経後に縮小した子宮腺筋症



50歳、閉経前後　　閉経後2年

多くの場合、閉経後の子宮筋腫は定期的な画像検査による経過観察は必ずしも必要ではありません。しかし、閉経後に新たな性器出血、下腹部痛、あるいは腹部膨満（下着がきつくなったなど）の症状を認めた場合は、悪性腫瘍を除外するための再評価が必要となります。

また、抱えている子宮筋腫が巨大であれば、加齢とともに深部静脈血栓症や腎不全などのリスクが想定されます。筋腫による圧迫症状（頻尿や便秘など）が出現した時には、摘出術を考慮することがあります。

症状を認めない子宮筋腫や子宮腺筋症の場合には、閉経後の定期的なＭＲＩなどの画像検査は原則不要ですが、症状が新たに出現した時は、精密検査や経過観察が必要です。

閉経前後以降は、エストロゲンの変化によって体のさまざまな不調が現れやすい時期です。体の変化に敏感になり、気になることがあれば早めに受診しましょう。健康な老後の第一歩となります。

無断複製・転載を禁じます